

## 第3回「日蓮」

学芸員 海老沼真治

### 1. 日蓮の生涯

今回は企画展「日蓮聖人と法華文化」にちなんで、日蓮に関する資料を読んでききます。

まず、基礎知識として日蓮の生涯を年表風にご紹介します。

貞応元年(一二二二)、安房国長狭郡東条郷片海(現在の千葉県鴨川市)で誕生。  
嘉禎三年(一二三七)、清澄寺で出家、この後、鎌倉・京都など諸国を遊学。  
建長五年(一二五三)、清澄寺で法華信仰の勸奨を始める(立教開宗)。

文応元年(一二六〇)七月、『立正安国論』を著し、北条時頼に提出する。翌月、念仏者に草庵を襲われる(松葉が谷の法難)。

弘長元年(一二六一)五月、伊豆に配流される(伊豆法難)。弘長三年に赦免。  
文永元年(一二六四)十一月、安房国東条松原で東条景信に襲撃される(小松原の法難)。

文永八年(一二七二)九月、幕府に逮捕され、龍ノ口で処刑を免れる(龍ノ口の法難)。十月二十八日、佐渡国に入る。

文永九年(一二七三)二月、佐渡塚原で『開目抄』を著す。

文永十年(一二七四)四月、佐渡一谷で『観心本尊抄』を著す。七月、「佐渡始頭本尊」を図顕。

文永十一年(一二七五)三月、佐渡流罪を赦免され、鎌倉に戻る。五月十七日、甲斐国身延山に入る。

建治元年(一二七五)、『撰時抄』を著す。

建治二年(一二七六)、七月、清澄寺での師道善房が死去、『報恩抄』を著す。

弘安二年(一二七九)九月、駿河熱原の法華信者の農民が逮捕され、翌月神四郎ら三名が斬首される(熱原法難)。

弘安四年(一二八二)十一月、身延に新坊が完成する。

弘安五年(一二八三)九月、身延を出て関東に向かい、十八日に武蔵国池上に到着する。十月十三日、池上の地で死去。

## 2. 日蓮の書状を読む

日蓮は曼荼羅本尊・著作・手紙などを数多く書き、弟子や信者に与えていました。日蓮が書き残したもの（ご真蹟）は、その死後にも弟子たちによって「聖教」「靈宝」として大切に守り継がれ、現在も多くのご真蹟が伝えられています。礼拝の対象である曼荼羅本尊や、『立正安国論』などの著作と同様に、書状も大切にされてきたことで、現在もたくさんの日蓮自筆の書状を読むことができます。

ただし、日蓮の書状は江戸時代の古文書と比べて、かなり独特の書き方をしているように見えると思います。いきなり読もうとしてもなかなか難しいでしょう。私も自身も読むのにとっても苦労しています。そこで、四月の講座でご説明した「(まず)『活字』を読んでみる」「活字」と古文書を見比べてみる」というやり方をお勧めしたいと思います。

日蓮の書状を読むことができる文献は多数ありますが、ここでは基礎的文献、入手しやすい文献を中心に紹介します。

### (写真が載っているもの)

『日蓮聖人真蹟集成』全十巻、法蔵館、1976～77年

『日蓮聖人と法華の至宝』第一巻（曼荼羅本尊）・第二巻（真蹟遺文）、同朋舎新社、2012年

### (テキストや現代語訳)

立正大学日蓮教学研究部編『昭和定本日蓮聖人遺文』身延山久遠寺、1952～68年

「日蓮聖人御遺文検索」(<https://www.xn--gmgx52bpnek914iu0fkyv.net>)

：『昭和定本日蓮聖人遺文』の全文のテキストを検索・閲覧できるサイトです。

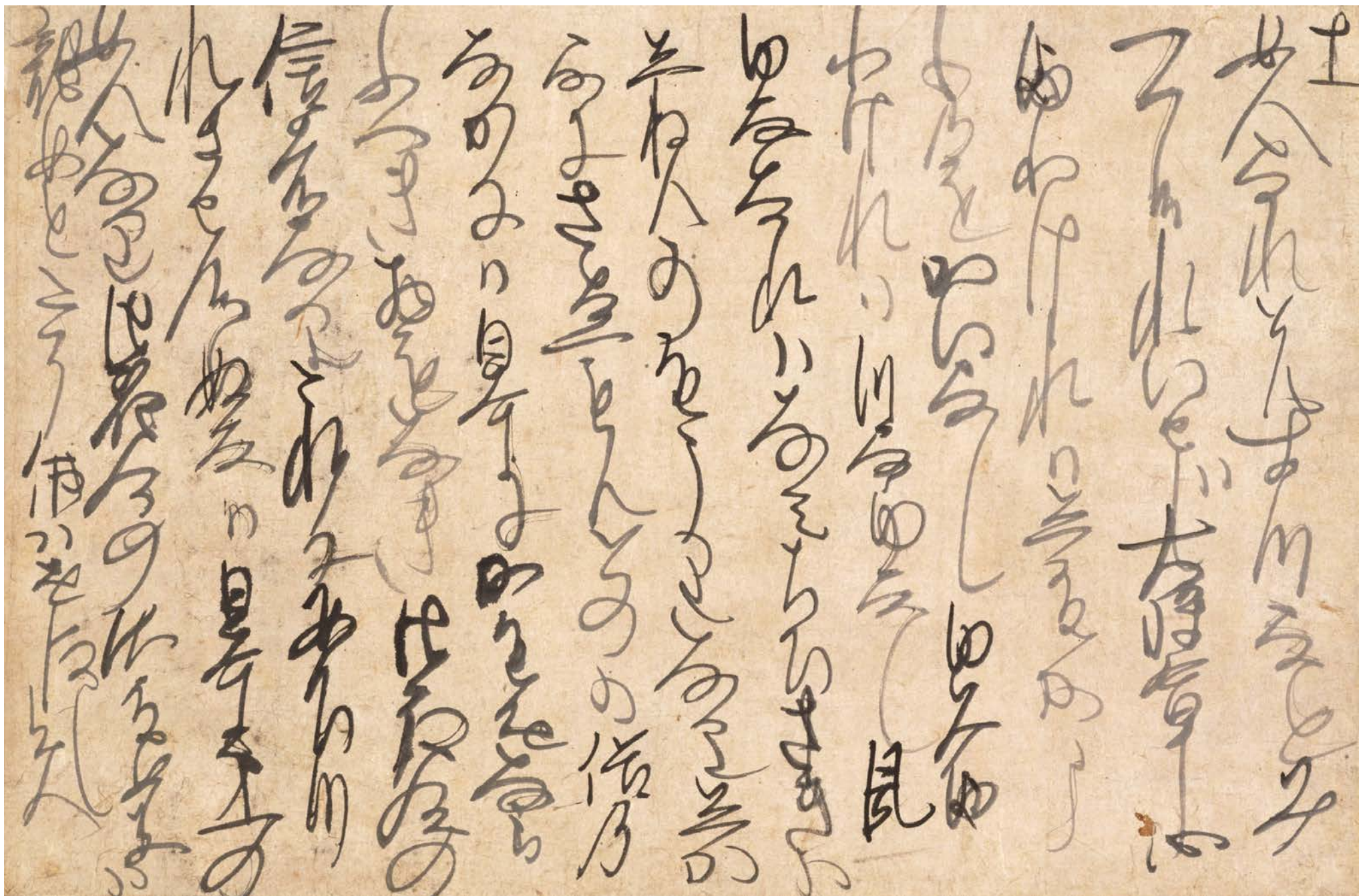
兜木正亨『日蓮文集』岩波文庫、1968年

中尾 堯『日蓮聖人からあなたへの手紙』日蓮宗新聞社、2012年

植木雅俊『日蓮の手紙』角川ソフィア文庫、2021年

では、今回はまず、日蓮自筆の書状を少し読んでみましょう。

⑭ ⑬ ⑫ ⑪ ⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①



これが日蓮自筆の書状の一例です。一見するとわからない字ばかりのように思えますが、一行ずつ読んでみましょう。

十一

女人なれとん、すつるとみ



「十一」はこの書状のページ番号です。日蓮は何枚にもわたって書状を書く際、このように隅にページ番号を振っていました。

「女人」は今の字とほぼ同じ形で書かれています。

「なれとん」も、すべて今の平仮名と同じ字です。「な」はこの後に出てくる「る」にも似たように見えますが、一く二画の筆の入り方が違います。

「ん」は漢字「无」がもとになっています。この一字で「ん・む・も」と複数の読み方があり、ここでは「も」として「女人なれども」と読むことができます。

「すつるとみ」も、すべて今の平仮名と同じ字です。このうち「つ」が分かり難いかもかもしれませんが、漢字「川」がもとになっていることはおわかりいただけるでしょう。

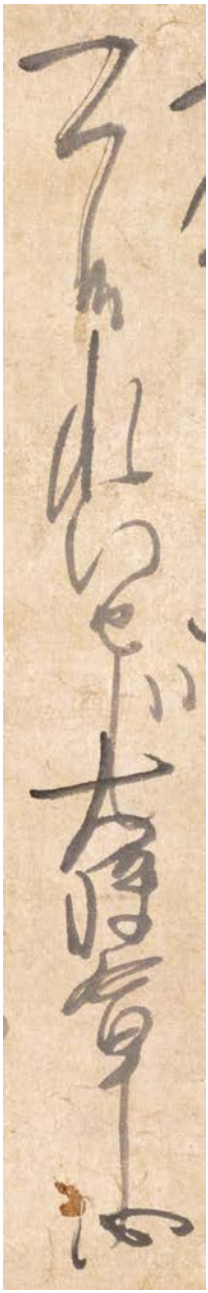
この行を漢字を入れて読むと「女人なれども、捨つると見」となります。

※一行目を読んでみましたが、一文字ずつ見ていくと、実は今の漢字や平仮名とほとんど同じ形の字を書いていることがわかります。

※以下、7 頁までの画像は、ColBase  
([https://colbase.nich.go.jp/collection\\_items/tnm/B-3099?locale=ja](https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tnm/B-3099?locale=ja)) をもとに作成したものです。

続いて2行目です。

# へて候、れいせ八、大將軍 心



「へて」は今の平仮名と同じ形です。「へ」は漢字の「一」にも見えそうですが、日蓮の書状ではこのように書かれることが多いようです。

「候」は江戸時代の古文書にも頻出する簡略化されたくずし字が書かれています。

「れいせ八」も今の平仮名・片仮名と同じ形です。実は「せ」の下に縦線が伸びており、「し」と書いたのでしょうか。おそらく、書いてから間違ったと気づき、横に「八」を書き、「し」の上から重ね書きのように次の字を書いていたのでしょう。この四文字を漢字を入れて読むと「例せば」となります。

「大將軍心」はすべて漢字で、今と同じ形です。「大」はほぼそのまま、

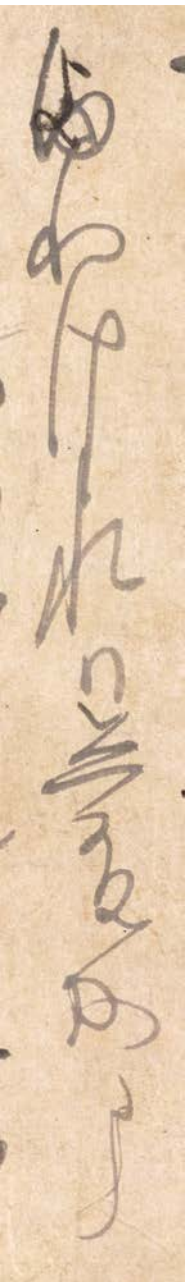
「心」のくずし方も辞典でも見られるものです。「將軍」は少し難しいかもしれませんが、「将」はやはり辞典でも類似するくずしが見られます。「軍」は一面ずつ筆の運びを見ていくと、わかってくるかもしれません。

前行の最後の「み」から漢字を入れて読むと、「見へて候、例せば、大將軍心」となります。

3行目です。

(よ)

ゆわ けれハ、した かう



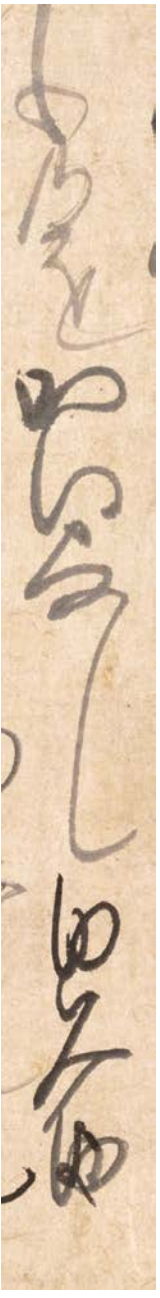
「ゆわけれハ」はすべて今の平仮名・片仮名と同じ形です。「ゆ」の上から「よ」が重ね書きされています。この「よ」は日蓮の自筆ではなく、後に書き加えられたものと思われます。漢字を入れて読むと「弱ければ」となります。

「したかう」のうち、「した」は今の平仮名と異なる字が用いられています。「し」は「志」、「た」は「堂」がそれぞれ当てられています。どちらも仮名としてよく使われます。「かう」は今と同じ平仮名ですね。この四文字を漢字を入れて読むと「従う」となります。

この行を漢字を入れて読むと「弱ければ、従う」となります。

4行目です。

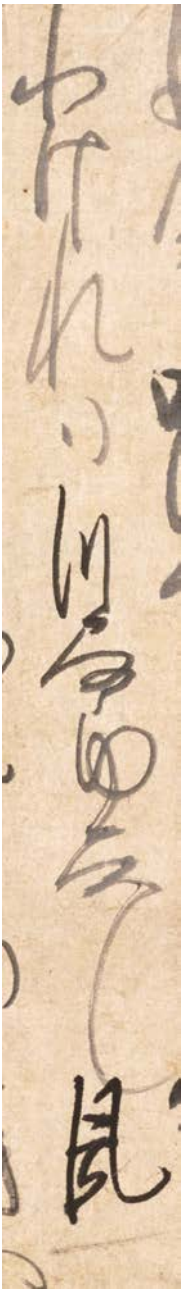
ものもかいなし、ゆみゆ (よ)



この行は、すべて現在と同じ平仮名で書かれています。「の」は元の漢字「乃」に近い形です。二度使われている「も」は違わずし方になっており、二文字目の「も」の方がより漢字に近い感じです。最後の「ゆ」には、三行目と同様、後から「よ」が重ね書きされています。この行を漢字を入れて読むと「**者も甲斐無し。弓よ**」となり、次行に続きます。

5行目です。

わけれハ、つるゆるし、風



この行も、すべて現在と同じ平仮名・漢字で書かれています。しかも平仮名はすべて前四行で出てきたものです。「つ」も一行目と同様に「川」であることがよくわかりますね。最後の「風」も、比較的わかりやすく書かれています。前行の一番最後の「ゆ(よ)」から漢字を入れて読むと、「**弱ければ、弦緩し。風**」となります。

いかがでしたでしょうか？

まだわからない文字が多かったかもしれません。しかし、一文字一文字は決して難しい字が書かれているわけではないことも、お分かりいただけたと思います。またその文字の多くは、日蓮以外の古文書にも使われる文字です。一つずつ学んでいけば、他の古文書を読む学習にもつながるでしょう。

※ただし、本来に一から古文書の学習を始めようとする方は、日蓮の書状からではなく、江戸時代の古文書などから始めることをお勧めします。

では、残りの行の解読に挑戦してみましよう。

### 【課題1】

3ページの写真⑥～⑭行を読んで、どんな文字が書いてあるか、翻刻文を作ってみましよう。

※ひとつの□に一文字が入ります。

※句読点は気にせず、文字だけ記入してください。

※前五行で読んだ文字もたびたび出てきますので、それらをみつけて読めるところを読んでいきましよう。

※わからなければ無理せず、飛ばして先を読み進めてください。



【課題1】 日蓮聖人書状 翻刻文

十一

① 女人なれとん、すつるとみ

② へて候、れいせハ、大將軍

③ ゆわけれハ、したかう

④ ものもかいなし、ゆみゆ

⑤ わけれハ、つるゆるし、風

⑥ ゆる□□□□□□□□

⑦ □□□□□□□□

⑧ るにさゑもん□□□□俗の

⑨ □□□□□□□□日本にかたを□□

⑩ □□□□□□□□法華經の

⑪ □□□□□□□□□□にあひ□

⑫ □□□□□□□□□□給ぬ□□第一□

⑬ □□□□□□□□□□法華經□□御□□□□□

⑭ 龍□□□□□□□□□□こそ仏□□□□□□□□□□め

【課題1】 解答例

十一

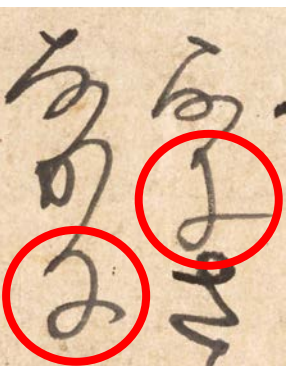
- ① 女人なれとん、すつるとみ
- ② へて候、れいせハ、大將軍
- ③ ゆわけれハ、したかう
- ④ ものもかいなし、ゆみゆ
- ⑤ わけれハ、つるゆるし、風
- ⑥ ゆる なれハ なミ ちひさきハ
- ⑦ しねんの たうり なりしか
- ⑧ るにさゑもん とのハ 俗の
- ⑨ なかにハ 日本にかたを なら
- ⑩ ふへき物 もなき 法華經の
- ⑪ 信者なりこれ にあひつ
- ⑫ れさせ 給ぬ るハ日本 第一の
- ⑬ 女人なり 法華經 の 御 ためには
- ⑭ 龍 女と こそ仏 ハをほし め

いかがでしたでしょうか？

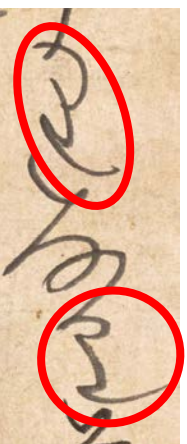
分からない文字が多かったかもしれませんが、既に読んだ文字が分かっていたら、まずは第一段階はクリアできたと言えます。何度も繰り返し読んで、日蓮が書く文字の形に慣れていくと、だんだん読める字が増えてくると思います。近道は無いので、少しずつ勉強していきましょう。

6行目以降も、今と同じ平仮名で書かれているものが多かったのですが、今とは違う字が使われているものをご説明します。

7行目に二度使われている「り」は、いずれも「里」の字をくずしたものです。



「に」

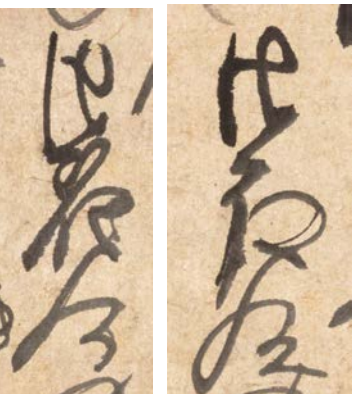


「り」

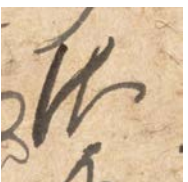
8行目以降に頻繁に使われている「に」は、いずれも「尔」の字をくずしたものです。「り」とともに江戸時代の古文書などにもよく使われます。

14行目の「そ」は、今の「そ」と同じく「曾」の字を崩していますが、「う」にも見えるので注意が必要です。くずし字辞典にはこのくずし方も載っています。

また漢字では、10行目・13行目の「法華経」、13行目の「御」は、日蓮の書状で頻繁に出てくるくずし方ですので、この形でおぼえてしまうとよいでしょう。「法華経」は、展示中の他の書状にも出ていますので、探してみてください。



「法華経」



「御」

最後に、漢字を入れた書状全文と意識をあげておきます。この書状は、日蓮の熱心な信者として知られる四条頼基（左衛門尉・金吾）の妻に出した書状の一部です。頼基夫人が三十三歳の厄年に、供養の品々を日蓮に贈ったことに対する返礼として書かれたものです。

## 【全文（漢字入り）】

：女人なれども、捨つると見へて候。例せば、大將軍心弱ければ、従う者も甲斐無し。弓弱ければ、弦緩し。風緩なれば、波小さきは自然の道理なり。しかるに左衛門殿は、俗の中には日本に肩を並ぶべき物もなき法華経の信者なり。これにあひ連れさせ給いぬるは、日本第一の女人なり。法華経の御ためには龍女とこそ仏は思しめ：

## 【意識例】

（信心の弱い人は、法華経を持つ）女人といっても、（法華経を）捨てる人に見えます。これを例えるなら、武士の将軍が心弱い人なら、従う兵がいくら戦っても甲斐の無いことです。弓が弱ければ、張ってある弦も弛んでしまいます。風が緩やかならば、波が小さくなるのは自然の道理です。しかるに、（あなたの夫である四条）左衛門殿は、俗人としては日本で肩を並べる人がいないほどの法華経の熱心な信者です。この人に連れ添っている女性は、日本第一の女性といえます。仏はあなたを法華経における龍女に等しい女性だと思いになるでしょう。



まず、最初の6行を少しづつ読んでみましょう。

たんじやうだい

### 御誕生第一

れんし しゃう ミクにうちちゝ とをとうみのくに

ぬきな しげさね

蓮師の姓ハ三国氏父ハ遠江国のあるじ貫名の重実

### 御誕生第一

蓮師乃姓ハ三国氏父ハ遠江国のあるじ貫名の重実

本文の仮名は今の文字と同じものです。ルビ「たんじやう」の「た」は「多」、「れんし」の「れ」は「連」の漢字をそれぞれにしたもので、よく使われる字です。

じなんしげただ

にちれん だい

しやうむくかうてい ぼつそん

か二男重忠なり日蓮ハ第四の子聖武皇帝の末孫

ゑんしう

あはの

ながさ

こほりとうでう

がう

父ハ遠州より安房国長狭の郡東條の郷のかたうミいち

④ ③  
二男重忠なり日蓮ハ第四の子聖武皇帝の末孫  
父ハ遠州より安房国長狭の郡東條の郷のかたうミいち

3行目冒頭の「か」は「可」をくずした字で、これもよく使われます。また下から3字目の「の」は「能」のくずし字です。4行目の下の方に「かたうミ」とあります。「か||可」と「う」は同じ字のようにも見えますが、違いがわかりますか？

また4行目の漢字「郷」は、くずしが2行目の「江」とよく似ており、注意が必要です。

むら

かハの村こみななどのうらにはなたれてぎよふとなれり母ハ

は、

きよハラウヂ

あき

てん

清原氏なりつねに朝日をねんじゆす日天むねをて

⑤ ⑥

くらの村こみまをれうくはまのうらにわたるはりの母ハ  
清原氏なりは移り船自と移んちち日天むねをて

5行目中ほど「はなたれて」の「は」は「者」のくずし、「な」は「奈」で  
いまの平仮名と同じですが、くずし方は日蓮書状の「な」に近いものがありま  
す。「て」は「天」でこれも今の字と同じですが、これもくずし方により、い  
まの「て」とは違う文字のようにも見えます。

6行目「つねに」の「つ」は「徒」、「ね」は「祢」で、どちらも漢字のよう  
にも見えますが、平仮名として使っています。「に」は日蓮書状にもたくさん  
出てきた字です。「朝日をねんじゆす」の「じ」は「志」で、これも日蓮書状  
に出てきた字です。「す」は「春」をくずしたもので、よく使われます。下か  
ら3文字目「ね」は「年」をくずした字で、これもよく使われます。

では、残りの行を読んでみましょう。

【課題3】

13ページの写真⑦と⑬の文章の翻刻文をつくってみましょう。

※次ページのシートに記入してください。

※振り仮名は読まなくても構いません。

【課題2】 翻刻文を書いてみましょう。

たんじやうだい

① 御誕生第一

れんし しやう ミくにうぢちゝ とをやうみのくに

ぬきな しげさね

② 蓮師の姓ハ三国氏父ハ遠江国のあるじ貫名の重実

じなんしげただ

にちれん だい

しやうむくはうてい

ぼつそん

③ か二男重忠なり日蓮ハ第四の子聖武皇帝の末孫

ゑんしう

あはの

ながさ

こほりとうてう

がう

④ 父ハ遠州より安房国長狭の郡東條の郷のかたうみいち

むら

はゝ

⑤ かハの村こみなとのうらにはなたれてぎよふとなれり母ハ

きよはらうぢ

あさ

てん

⑥ 清原氏なりつねに朝日をねんじゆす日天むねをて

⑦ らすと夢に見給ひて

⑧ 後堀川院の

⑨ むまのこく

此かた

⑩ 二千百七十

⑪ 給ひ日蓮ハ

⑫ めでその

⑬ かなる

これを

⑭ うぶ湯の水といふなり

※解答例は次ページにあります。



【解答例】

① 御誕生第一

れんし しやう ミくにうぢちち とぎやうみのくに たんじやうだい  
ぬきな しげざね

② 蓮師の姓ハ三国氏父ハ遠江国のあるじ貫名の重実

じなんしげただ にちれん だい しやうむくかうてい ばつそん

③ が二男重忠なり日蓮ハ第四の子聖武皇帝の末孫

えんしう あはの ながさ こほりとつでつ がう

④ 父ハ遠州より安房国長狭の郡東條の郷のかたうみいち

おひむ はい

⑤ かハの村こみなとのうらにはなたれてぎよふとなれり母ハ

きよハラうぢぢ あさ てん

⑥ 清原氏なりつねに朝日をねんじゆす日天むねをて

ゆめ

⑦ らすと夢に見給ひてはらめりほんてう八十六代のみかと

こほりかハのあん でうおうぐわん

⑧ 後堀川院の御時貞応元年ミつのえむま二月十六日の

しやかにやらい

⑨ むまのこくに生れ給へり釈迦如来の御にうめつより此かた

⑩ 二千百七十一年にあたるによらいハ二月十五日にねはんし

ししやう

⑪ 給ひ日蓮ハ二月十六日にたんしやうなれり死生のつ

⑫ ゐでそのゆへあり此ほとりにすこしの水ありい

⑬ かなる日てりにもこのミづびひる事なしこれを

ゆ

⑭ うぶ湯の水といふなり

いかがでしたでしょうか？

少し長かったかもしれませんが、すでに読んだ文字が多く出てきましたし、今の平仮名と同じ形の字も多かったので、読めたところもあったと思います。

説明をしていなかった変体仮名としては

⑦・⑫行目「ほ」||「本」

⑬行目「を」||「越」

⑭行目「ぶ」||「婦」 くらいです。

この他、漢字でよく目にするものとして、

⑦・⑨・⑪行目「給」

⑬行目「事」

⑭行目「水」

などがありました。これらは、この形で憶えておくとよいでしょう。

これらを押さえておけば、一つの文字に対する様々なくずし方を学ぶことにもつながります。

では、最後に同じ『日蓮聖人註画讃』から、身延入山の段の解読に挑戦してみましょう。

### 【課題3】

次頁の写真②〜⑨の文章の翻刻文をつくってみましょう。

※次ページのシートに記入してください。

※振り仮名は読まなくても構いません。

【課題2】 翻刻文を書いてみましょう。

⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

身延山入第二十七

今此のすゝめ三たひにをよひ給へ共  
波木井の郷に入給ふ  
山に  
むかつて  
き河あり

鷹取のたけ雪をつらね西にハ七面の

①

身延山入第二十七

② 今のすゝめ三たひにをよひ給へ共

③ 山林にいらんと

④ まくらを出て酒匂

⑤ くるまかへし

⑥ 波木井の郷に入給ふ

⑦ 山に

⑧ むかつて

⑨ き河あり

鷹取のたけ雪をつらね西にハ七面の

※解答例は次ページにあります。

【解答例】

① しんゑんさんいり  
身延山入第二十七

- ②今のすゝめ三たひにをよひ給へ共国主もちひ給ハねば  
さんりん
- ③山林にいらんとおほしめし同じき年の五月十二日にか  
さかわ
- ④まくらを出て酒匂にやり給ふ十三日に竹下十四日に  
なんぶ
- ⑤くるまかへし十五日に大宮十六日に南部十七日にかひの国  
はきりあ かう
- ⑥波木井の郷に入給ふ六月十七日にはしめていほりを身延
- ⑦山にむすひ給ふ見れハそれひかしのふもとよりみなみに
- ⑧むかつてなかれのはやき事大ゆミの矢をはなつよりはや  
たか
- ⑨き河ありみなみにハ鷹取のたけ雪をつらね西にハ七面の  
なほおもて

いかがでしたでしょうか？

この場面は、日蓮が鎌倉を出て身延山に入る行程を示しており、企画展で展示中の日蓮聖人書状（富木殿御書、No. 64、鏡忍寺蔵）にも書かれています。身延入山のことを日蓮自らが書いた貴重な書状です。11月1日までの展示ですので、ぜひそれまでにご覧ください。

今回の講座は以上になります。

お付き合いいただきありがとうございました。